

大人が絵本を 第27回 「絵本の力」「場の力」

司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事/ファウンダー

小児科待合室で絵本を声に出して読みあ うのはマナー違反?

本の専門家である司書を生業としている私は、社会における書籍の役割の大切さを考えます。もしかすると考えすぎて「司書病」という職業病に罹患してしまったのではと、ふと立ち止まることが時にあります。書籍を愛しすぎた「司書病」なんて自分勝手に考えています。

私たちの図書館はSNSを有効に使って社会との距離を縮めています。ホームページ、ブログ、メールマガジン、フェイスブック、インスタグラム等々を情報発信として多用するとその反面、ありとあらゆる情報が無数に入ってきます。そして私は悩み始めるのです。

「小児科で、子どもに大きな声で絵本を読んでいる母親がうるさくて腹が立つ」等のコメントがとにかく多いのです。「その母親はこんなにも真剣に読み聞かせて、良い母親でしょ?という顔をして、周りの迷惑に全く気付いていません」他にも「わざとらしい声かけや、子どもを誉める言葉に違和感さえ感じた」「母親の自己陶醉」「私って良いママでしょアピール」「子どもに読み聞かせをしている素敵なお母さんをアピール」。さらには「待合室にはテレビもあったのですが、そのママの声で聞こえませんでした」という意見を目にしてしまうと、また悩むのです。「体調の悪い方も多いので、控えめに読んであげたらいいのに」という意見は納得できます。公共の場で具合の悪い方への配慮も必要ですが、子どもたちが集まる小児科の待合室での出来事に対して発せられている意見には、悲しく落ち込んでしまいます。絵本が台無しにされてしまったと、本当の「絵本の役割」ができていないと感じる「司書病」で

しょうか。

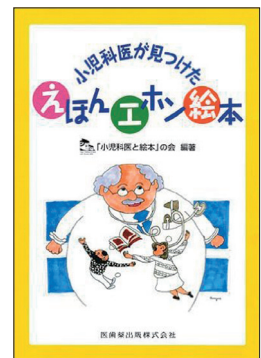
たまたま、不満のはけ口としてSNSにあげたコメントが重なっただけで、SNSにのせないお母様方は何とも思っていなかったり、微笑ましく感じたりしている方も多いと思います。私が実際に、耳鼻科や皮膚科の待合室で遭遇したお母様方は、お子様が絵本を持ってきて「読んで」と言っても、「ちょっと待って」と言ったまま、スマホを扱い続けていました。さてさて、どのようなお母様が母親らしいのでしょうか。

小児科から広げる絵本のすばらしさ

病院の待合室には必ずと言ってよいほど、絵本と大人向け雑誌が置いてあります。遡ること約17年前の2000年に開催された第10回日本外来小児科学会で、「待合室の絵本」をテーマにワークショップが開催され、「絵本のすばらしさを小児科待合室から広げよう」というスローガンが生まれたことで、絵本のもつ力の多様性と奥深さが認識され始めました¹⁾。また、その学会を契機として2005年には『小児科医が選んだ えほんエホン絵本』が出版され、小児医療の現場に絵本は欠かせないツールとして定着しました。

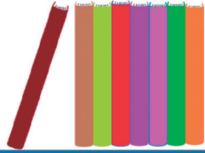
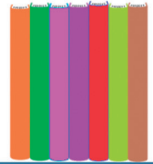


『小児科医と絵本』の会 編著
『小児科医が見つけた えほんエホン絵本』
(医歯薬出版)



手にするときは！

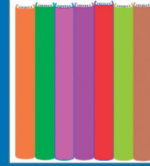
を小児歯科医療に活かそう



企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ***

*** 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



待合室に絵本を置く理由として、社会一般的には、待ち時間を子どもに退屈させないためという解釈が多いと思います。それは、もともとからあった大きな理由です。『小児科医が選んだ えほんエホン絵本』の巻頭で佐々木邦明先生は、「待合室や子どもが集まる場所には、テレビやビデオを置かずに、絵本を並べてほしい」²⁾との願いを綴っています。また「絵本は、読み聞かせてもらうこともと、読み聞かせるおとなの二つの心の間を不思議な親密感で結びます。お互いを慈しむための大事な言葉を学んでいくことでしょう。さあ、恥ずかしがらずに大きな声で絵本を読んでみましょう。きっと誰かが耳を傾けてくれるに違いありません」²⁾と呼びかけています。大人も病院受診の待ち時間にスマホを扱うよりも、待合室のテレビを観るよりも、同じ空間を共有している親子が読んでいる絵本に耳をそばだたせて聞き、懐かしんだり、微笑んだり、一緒になって楽しむことができれば、体調の悪さから救われ心がより豊かになれるのではないのでしょうか。そんな医療環境が必要です。



絵本は小児歯科医療に必須のアイテムです

小児歯科医院の待合室は、小児科と違って病気の子どもの割合は低いので、待合室には元気な子どもたちの声が飛び交い、診療室では診療を頑張る子どもたちの大声が聞こえます。一日のほとんどの時間が賑やかで、活気があります。木のおもちゃで遊んだり、絵本の読みあいをしたりして待ち時間を過ごしています。司書が院内へ読みあいに行くこともありますが、そんなとき、近くで読書をされている方がいるときは別として、ボソボソと小声でなんて読みません。通常と変わらないボリュームで読

み、絵本を共有している子ども以外にも興味を示してもらえるような工夫をしています。第一、歯科医院でこそ大きな力を発揮してくれる「元気」や「勇氣」の湧いてくるような絵本をボソボソと読んでも、その絵本の魅力はちっとも伝わらず楽しくありません。特別なことが好きな子どもたちは、次は自分の番だとばかりに、待合室の本棚から選んで持ってきた絵本を「これ読んで！」と差し出してくれます。

この連載で何度も発信してきましたが、私たちは小児歯科医療の現場にいて、絵本を「時間潰し」の小道具とは考えず、医療のアイテムとして活用しているのです。診療中の子どもたちのチェアサイドで読みあう、もうすぐ名前が呼ばれるだろうと緊張しながら診療を待っている子どもたちのリラクゼーション効果を期待して読みあう、診療が終わって待合室に戻ってきた子どもたちへ「頑張ったご褒美」に、その子の好きな絵本を読みあう、待合室でおはなし会を開催して、その場が歯科医院でないような雰囲気を演出する、あるいは診療中の子どもたちが楽しそうなおはなし会の声を聞き、仲間入りしたいと逸る気持ちが診療に協力的になるなど様々です。実際

【歯科診療で活躍した絵本】

院内おはなし会のこの日、Aちゃんは診療で来院。診療中に聞こえてくる「やきいもグーチャーパー」の遊びが楽しそう、DHに教えてもらって大喜び。途切れ途切れに聞こえてくる『さつまのおいも』のお話、DHと盛り上がる。おはなし会が終わったのなら「司書のお姉さん、私にも読んでよ」とフッ素の間に読みあい。



中川ひろたか 文
村上康成 絵
『さつまのおいも』(童心社)



【歯科診療で活躍した絵本】
おはなし会が終わった後の診療で終始、泣き続けていたNくんと、診療後に読みあった絵本。
泣きじゃくりながらも、知っている野菜の名前を言葉にして読みあっているうちに、2冊目の読み終わりには、涙なんて消えちゃったよ。



いしかわこうじ
『やさしいいろいろかくれんぼ』(ポプラ社)

に、おはなし会が見える位置のユニットでちらちらと絵本を見ながら診療を受けていた子どもたちは、診療が終わるや否やまっしぐらにおはなし会コーナーにやってきて、物語世界に入り込みます。子どもたちの切り替え能力の高さには驚かされるばかりです。

子どもたちの心をサポートする

歯科医院が「診療に絵本を活用する」と聞くと、「歯」や「虫歯」、「歯磨き」がテーマの絵本を用いて歯科指導に活用すると連想されるでしょう。歯科診療や衛生指導のツールとして、歯の絵本を活用するという方法は、もちろんあります。しかし、当医院では歯に関する診療や指導は、専門家である歯科医師や歯科衛生士が、その技能でしっかりと行っており、ここでの絵本の役割は指導を受けたお母様と子どもたちが絵本を読みあうことで生まれる共有感の創造なのです。

私たち「医療法人 元気が湧く」が絵本を歯科診療に取り入れているのは、精神面への支援のためであり、関係づくりのためなのです。だから、歯に関する絵本でなくてよいのです。歯科医院という恐怖感を強く伴う場所に対する、子どもたちの意識変容を図るために、楽しいイメージを持ち合わせる絵本の力を借りているのです。「歯医者さんは怖いばかりの所ではない」、「歯医者さんには楽しい遊びがいっぱいある」、「歯医者さんで読んでくれる絵本は、お

もしろいお話がいっぱい」、「歯医者さんのおはなし会に早く行きたいな」といったイメージ変容を期待しているものです。院内おはなし会を立ち上げて2年も経たない頃には、実際に後者の声が聞こえてきました。

「場の力」を最大限に活かす

アクションを積み重ねていくことで、このような変化が見られるようになったのはなぜでしょう。それは当館の選書者のひとり、児童文学作家で、ノートルダム清心女子大学教授の村中李衣氏が提唱する「場の力」³⁾だと信じています。村中氏は、お年寄りとの読みあいの体験事例を基に「絵本を読みあうということは、絵本の力が場の力によって育てられる」と論じています³⁾。歯科医院待合室のおはなし会では、聞き手と読み手が共に作る場の力、それに歯科医師も歯科衛生士も、受付保育士も加わって一丸となって作り出す院内全体の「場の力」ということです。目の前でお話を聞く子どもたちの反応に読み手が喜びを感じ、楽しそうなお話や手遊びが聞こえてくるユニットでは、診療中の子どもたちと歯科衛生士や歯科医師の会話も弾み、そしてユニットの子どもたちは早くあのお話の場に加わりたいという気持ちを掻き立てられるのです。持ち場はそれぞれ異なるけれど、そここの子どもと大人みんなが同じテーマについてやりとりし、院内全体の場が一体感を持っているのです。

大切なのは、絵本が診療待ちの時間潰しだけにならないことと同じように、待合室そのものが診療前後の通過点にならず、子育て支援の場として患者様の意識改革につなげることだと考えます。子どもにとっても待合室が、ただ待っている場所ではなく、「緊張を解きほぐしてくれる場所」、「自分の気持ちを支えてくれる所」、「自分の気持ちを表せる場所」でありたいと思っています。

そこには、人とツール、つまり歯科医師、歯科衛

生士、受付保育士、司書がいて、絵本や木のおもちゃ、必要に応じてパンフレットなどを配備して快適な待合室環境を維持することです。

読み合いの手法

村中氏は小児病棟での関わりを当初、「読書療法」という心理療法の一方法として出発しましたが、子どもたちと接していくうちに多くの気づきをされて、読書療法ではなく、「絵本の読みあい」という場づくりの言葉へと変わっていきました。読書療法の治療効果には、①同一視、②情動触発(感情のはき出し、カタルシス)、③創造的洞察という3つのプロセスを経て治療に至るとされています⁴⁾。しかしながら、村中氏の提唱を支持する私たちも読書療法的介入ではなく、場を共有する「読みあい」という関わり方でもって子どもたちと接していくスタンスは、今もこれからも変わりありません。なぜなら、村中氏が読書療法を実践していく中で、その方法に疑問や不安をもつようになり、「関係性」の問題に着目して読書療法がコミュニケーションの問題へつながったと示していることに共感したからです。「現在そこに在るその人間とどんな自由な場をつくり得るか、場の中で互いにどこまで育ちあえるか、互いにどこまで場を育てあえるかが重要」⁵⁾という解釈こそ、私たちが実践すべき着眼点だと考えます。

読みあいを行うことで、読書療法に類似した効果が得られたら、それはひとつの成果となるでしょう。特に、歯科診療に対して大なり小なり恐怖感や不安感を抱えている子どもたちを受け入れる小児歯科医院では、読みあいの手法が最もふさわしいあり方だと言えます。

読みあいを通して、診療前・中・後の子どもたちの精神を少しでも安定させることができ、子どもたちの不安感や恐怖感が若干でも和らいだら、それは私たちにとっても安心を覚えるものです。小児は気持ちや言葉をうまく言葉に表せないことも多く、また、子

どもの人権配慮の視点からも、小児の医療現場では独特の配慮やサービス方法が要求されます。そのとき、絵本は大きな力となって支えてくれるのです。

子育てしやすい地域社会づくりを

子どもたちにとってストレスを伴う小児歯科医院で、少しでもホッとする瞬間を持って、笑顔と喜びの声が聞こえる楽しい空間づくりも、デンタル・コメディカルの重要な役割です。その際、コミュニケーションのツールとして絵本の力と場の力を引き出すことも、スタッフが牽引者となって子どもたち、親子たちと共に作りだしていただけるのです。

子どもたちの集まる場所では、それが病院であっても絵本を真ん中に、楽しそうな空間づくりを心掛けたいものです。病院の待合室にいて、子どもと読みあいをしている母親に負のまなざしを向けるよりも、日本の宝である小さな子どもたちと一緒に当たり前に絵本を楽しめる場所が、家庭と図書館、子どもプラザ以外にも、病院の待合室や美容院、駅の待合室の一角などあちこちにできたら、この国も感性豊かな子育てのしやすい国になるのではないのでしょうか。

文献

- 1) 佐々木邦明：待合室の絵本，こどもの図書館，48：19-21，2001.
- 2) 「小児科医と絵本」の会：小児科医が選んだ えほんエホン絵本，医歯薬出版，東京，2005，pp. iv - v .
- 3) 村中李衣：お年寄りとお絵本を読みあう，ぶどう社，東京，2002，pp.11-21.
- 4) 村中李衣：子どもと絵本を読みあう，ぶどう社，東京，2002，pp.111-130.
- 5) 村中李衣：読書療法から読みあいへー場としての絵本，教育出版，東京，1998，pp.185-192.

